

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

平成 27 年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）追・再試験についての作題方針は本試験と同様である。本試験同様の方針に従い、難易度に関してもほぼ同じレベルで、作題材料のみ重複を避けるという方針で出題した。

高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）、及び日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という。）から寄せられた意見・評価を大いに参考にした。教科担当教員からは「今回も本試験に比べてやや高く難易度を設定している印象を受けたが、受験者が、既に公開されている本試験問題を知っているという前提を持つ追・再試験という性格を考えるとそれもまた適切であると考えている。全体的に追・再試験というごく少数の受験者のために使われる試験となってしまうのが惜しいと思われるほど、品質の高い出題である」との高い評価を得ている。

来年度以降の作題に際しても本試験と同水準の良問作成を心掛けていきたい。

2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1～6問全体にわたって語彙の選択に当たっては、高校生が使用する独和辞典類の中から、高校生の生活圏を顧慮しつつ、とりわけ重要度の高いものを選んで問題の中で用いるようにした。形態としては、平成27年度も、平成20年度から採用している大問6題という形式を継承した。

平成27年度

発音・文法	第1～3問	22問	70点
会話・コミュニケーション	第4問・第5問	14問	70点
長文読解	第6問	10問	60点

第1問～第3問は、基本的な文法の理解を問う問題である。各設問の出題方針は、本試験のそれと基本的に同じである。第1問では主として単語レベルで問うことのできる文法項目と基本語彙を、第2問では文の理解を前提にした上で問うことのできる文法項目と熟語表現を、第3問では様々な文法的手段や熟語表現を組み合わせ構成された文の統語構造の理解を、それぞれ問う出題を行った。なお、出題形式及び配点は、今回の本試験に合わせた。

第1問 問1から問3までが発音に関する問題、問4と問8が名詞の性を含めた基本語彙を問う問題、問5から問7までが語形変化の問題である。評価については、教科担当教員からは、レベルの高い段階の設問もあり高めの難易度だったが追・再試験としては妥当であるとされた。一方、ドイツ語教育部会からは「総じて良問」と評価されている。問4の Irrtum については教科担当教員、ドイツ語教育部会双方から難しいとされたが、追・再試験としては許容範囲と考えている。

第2問 文を理解した上で問うことのできる文法項目と熟語表現を出題したが、一部の問題について難易度が高いのではないか、との指摘を受けた。教科担当教員からは本試験よりも難易度が高いと評価されたが、他方ドイツ語教育部会の方からは「本試験のように日常でよく使われる比較的高度な表現」はなく、「総じて基本的事柄を問う良問が多い」とされ、難易度の点でやや評価が分かれた。教科担当教員からは、問6について現在完了形であることが分かれば動詞の意味が分からなくても解くことができるとの指摘を受けている。それに対して問7は、

als obと接続法Ⅱ式を問うことについて比較的高度だと指摘され、またドイツ語教育部会からは、問10が文構造と否定表現が問われる難度の高い問題とされている。しかし、一方でこのように難しい設問と易しい設問とが適度に混ざっていることで受験者のレベルをより正確に判定できるとも言えよう。また、als ob構文はたしかに接続法Ⅱ式を使うので難しいかもしれないが、受験者が知っておくべき表現だと考える。

第3問 出題意図は、基本的文法手段や熟語を用いて構成された文の統語構造を正しく理解できるかを測ることにある。教科担当教員の方から難易度は妥当だが、設問箇所のどちらか一方が正答なら評価してほしいとの要望が寄せられている。ここでは確かに文法事項が「性格の異なるものが組み合わされている」とは言え、その組合せの理解をこそ問うというのが設問の趣旨だった。また2箇所とも正解ではじめて点を与えるという方式で従来、受験者の識別率が高かったということを勘案すると、やはり2箇所正解で配点という方式の方が良いと判断する。そもそも文章の統語的構成を理解するという趣旨からして、囲み空欄ばかりでなく下線部空欄にも全て語を入れられることを前提とした設問であることを、いま一度強調しておきたい。

教科担当教員、ドイツ語教育部会とも第3問全体の難易度については本試験との差異は感じられない、あるいは本試験よりもやや難しい表現が含まれていて少々難しいとは言えおおむね適切な設問である、と評価していただいている。

第4問 Aは短い会話文から成るテキストに基づいた問題であり、基本的な会話表現についての習熟度や、会話の流れの理解力を問うものである。

Bは、Aよりやや長い会話文であり、会話の流れの理解を問う問題である。

Cは、Bよりさらに長い会話文であり、会話の流れを追うとともに、この会話内容を表す表を選択する問題を含んでいる。

第4問については、ドイツ語教育部会から「難易度は適正である。」とのコメントをいただいている。限られた分量の中で「自然な」会話を成立させることには様々な困難が伴うが、今後とも工夫を重ねていく所存である。

第5問 例年どおり、長めの少し入り組んだ内容の会話文と、それに対するいくつかの設問から構成された問題である。問2は、会話のテーマである「誕生日会」に結局何人の参加者が見込まれるのか、という読解力と論理的思考能力を問う問題として作題した。教科担当教員からは、「良問である」との評価をいただいている。

解答結果については、受験者数が極端に少ないため、客観的な判断を下すことが難しい。したがって、解答結果についての記述は割愛する。今後も安定した水準を保ち続けられるよう精進したい。

第6問 ドイツにおける仕事と休暇の関係とバランスを、ドイツ人と日本人の休暇の過ごし方の違いを比較しつつ論じた文章を読ませた上で、ドイツ語の読解力を問う問題である。本試験と同様、使用する語は基本語彙の範囲内にとどめ、難解な語には注を付し、基本的な文法知識と語彙力があれば正答にたどり着くことができるよう配慮した。また、選択肢の中に解答のヒントとなるような表現を交えることによって、テキスト理解の一助とした。語数も277語で、本試験と変わらない。教科担当教員からは、文章の難易度が本試験より高い印象を持ったという意見を受けた。また、ドイツ語教育部会からも、「語のレベルでは本試験より難度の高いものが少ない印象だが、言い回しや文のレベルでは本試験より難度が高い表現も見られる。全体として内容はつかみやすいものの、設問の難度はやや高めである」という評価を受けた。作題委員としては、追・再試験の受験者が予め本試験の問題を参照した上で受験するであろうことを考慮すれば、適切な難易度であったと認識している。

- 問1 下線部の内容を問う問題である。教科担当教員とドイツ語教育部会の双方から、かなり難しい設問であるとの評価を受けた。確かに最初の設問としては難易度が高かったかもしれないが、長文問題全体のバランスから考えれば問題はないと認識する。
- 問2 下線部の内容を問う問題である。ドイツ語部会からは文意味の正確な理解を求める点は良いが、やや難問ではないかという評価を受けた一方で、教科担当教員からは選択肢が日本語のため、比較的容易に正答が分かるようになっているとの評価を受けた。問題作成部会としては難易度に関してはバランスがとれた問題作成を心掛けているが、今後の参考にした。また、内容が現在のドイツの実情とずれがあるとの見解もいただいた。今後はこのような時事的な話題の扱いには特に気をつけたい。
- 問5 下線部が主張していることの理由を本文中から読み取る問題である。ドイツ語教育部会から下線部の einen touristischen Zweck は難度が高いとの指摘を受けたが、文章の流れを正確に理解していれば、正答を導くことはできると認識している。
- 問8 下線部の内容を問う問題である。この文章で重要な語である effektiv を正確に文脈に即して理解できるかどうかを問う問題である。ドイツ語部会からは Effektivität、Produktivität など難度が高い語の意味の正確な理解が、解答の判断を左右するとの指摘を受けた一方で、教科担当教員からは下線部も選択肢もそれほど難しくはないとの評価を受けた。難易度の判定は難しいが、今後とも適切な難易度の問題の作成ができるよう配慮したい。
- 問9 本文全体の主旨を問う問題である。教科担当教員から選択肢の内容がどれも、ドイツ人についての一般常識内のものなので、本文で取り上げられているかどうかをしっかりと読み取る必要があるとの評価を受けた一方で、ドイツ語教育部会からは、③は relativ の意味が分からなければ排除できないので、「もっとも」とか「必ず」などが含まれている選択肢は排除した方が良く、受験テクニックを弄しての正解を誘発してしまう、などの意見をいただいた。今後ともより適切な選択肢となるよう検討を重ねたい。

3 ま と め

本試験に準ずる。